

瓦谷遺跡群における埴輪棺の展開についての一考察

有井 広幸

1. はじめに

今回、考察する題材として取り上げる瓦谷古墳群は、京都府相楽郡木津町大字市坂に所在する瓦谷遺跡内の、古墳時代前期末から中期にかけての古墳群である。瓦谷古墳群は、木津の平地を東から一望できる標高50~60mの丘陵端部に、全長約48mの前方後円墳1基を中心に、方墳8基と円墳1基により計10基で古墳群を形成する。古墳群の周囲には、埴輪棺や土器棺、木棺墓や土壙墓が設けられ、当時の階層構造を知るうえで、貴重な遺跡である。^(注1) これらの中で、埴輪棺は、この古墳群で使用された埴輪を転用して、古墳群が成立した時期と近い時期に造られたと考えられ、その構造的変化が追えると考えている。この視点から、瓦谷古墳群の南側の瓦谷埴輪窯付近で検出された特製埴輪棺^(注2)も視野にいれて、この遺跡における埴輪棺の動静を考えたい。既にこの分布のあり方や、各古墳と各埴輪棺の関係、埴輪棺の構造については、石井氏が詳細な分析を行っている。^(注3) 今回、私が注目したい点は、埴輪棺の棺身構造と小口の閉塞の方法に時期差があり、埴輪棺が完成していく過程が、瓦谷古墳群内で検討できるのではないかと思うからである。屋上屋を架する様な気持ちではあるが、私見としてまとめておきたい。

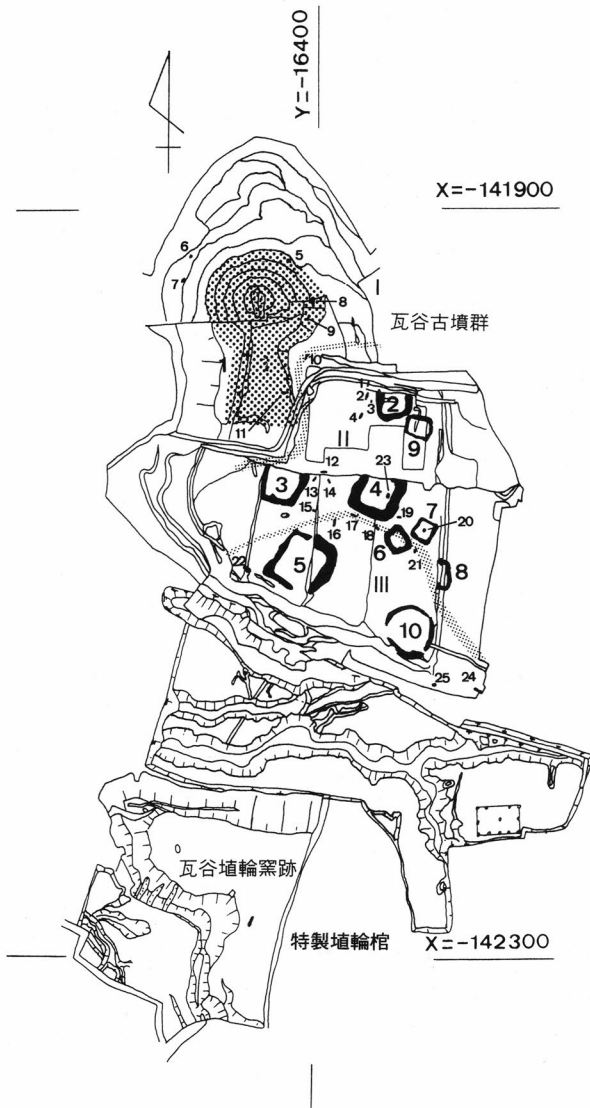
2. 埴輪棺の分布と構造

全国の例を引くまでもなく、埴輪棺の基本構造は、遺体を収納したと考えられる、埴輪の円筒部分を利用した棺身部分を持ち、開口する両小口を、埴輪の破片等で閉塞するのが最も基本的な形態と言えよう。

棺身部分のつくり方については、単数の円筒埴輪を用いる場合や、複数個体の円筒部分を、ソケット状に繋いだり、合わせ口としたりとかなりの変化があり、瓦谷古墳群内にも複数のパターンが存在する。この基本形の棺身の場合、円筒部分はほとんどが完形ないし完形に近いものが使われており、被葬者の状況によって(主に棺身長を調整するために)複数個体が、そのときの工夫で使用されていると考えている。瓦谷古墳群内の埴輪棺では、棺全長が1m未満のものも多く、成人の遺骸をそのまま入れることが困難な例もあり、小

兎棺として使用した可能性がある。また、改葬された可能性も全国例で指摘されているが^(注4)、瓦谷古墳群内では、骨等も残っていないため、詳しいことは不明である。小口の閉塞についても、瓦谷古墳群内において板状の埴輪片を使ったものや、蓋型埴輪の笠部を使ったもの、朝顔形ないし壺形埴輪の頸部以上の部分を使用したもののほかに、土師器の甕を使ったものといろんなバリエーションがある。以下、瓦谷古墳群中の埴輪棺の構造状況を例をあげながら見ていきたい。

瓦谷古墳群中の埴輪棺は、調査総数で25基ある。この内、前方後円墳である1号墳の墳丘周辺部に7基の埴輪棺が分布し、そのほかは小方墳内や、その周辺に分布している(第



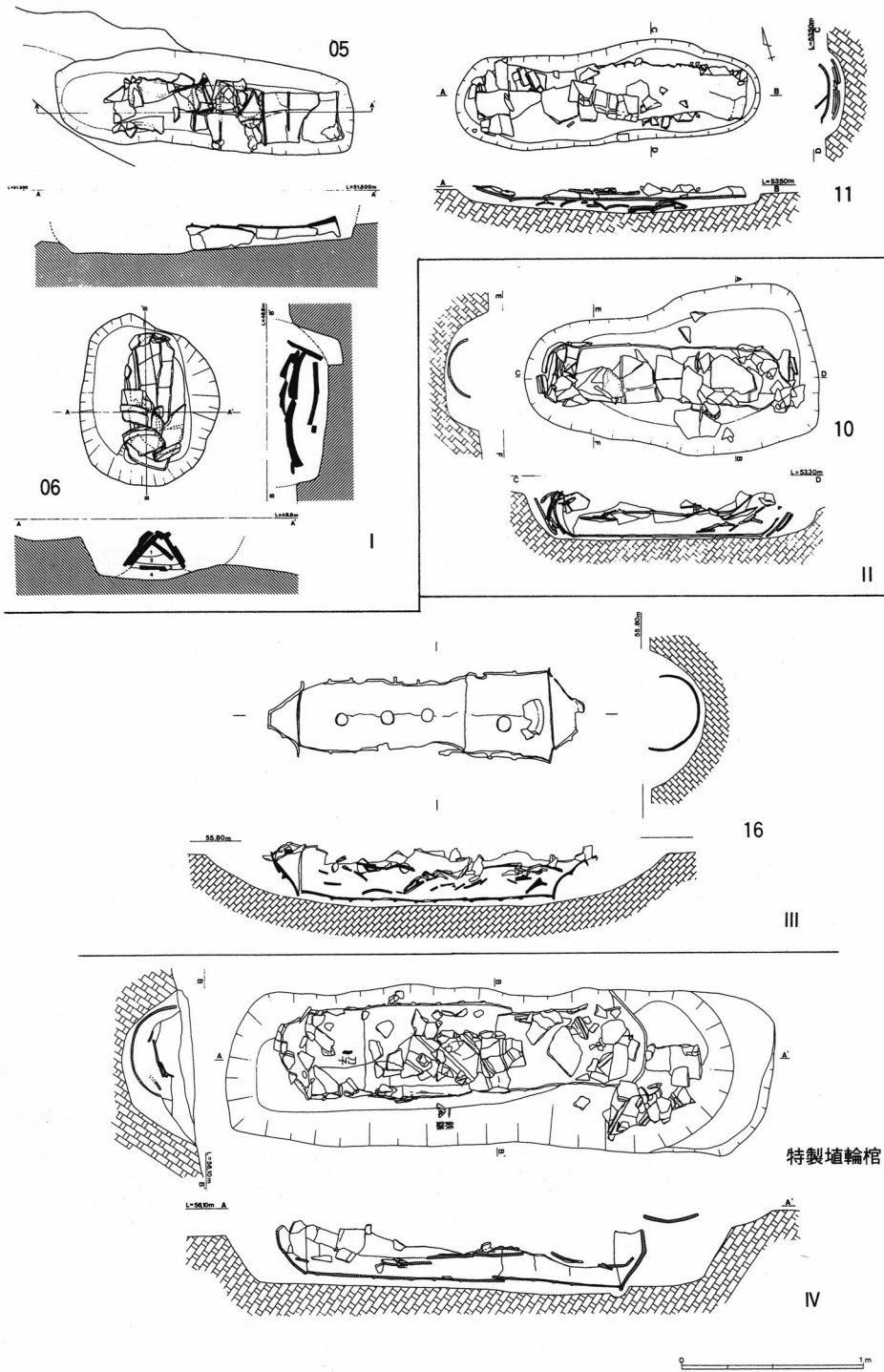
第1図 瓦谷遺跡群遺構配置図

1・2図)。

Iグループ(1号墳周辺に分布：埴輪棺05・06・07・08・09・11)

1号墳周辺では、棺に埴輪片の小片を組み合わせた例が目立っている。

埴輪棺06は、1号墳後円部北西墳丘外に設けられている。蓋形埴輪の円筒基部から笠部にかけての破片を棺底及び蓋として用い、円筒状の棺身をもたない、非常に特異な例である。埴輪棺05は後円部北東裾付近に設けられている。この埴輪棺では、棺底部分にあたる埴輪片がなく、鱗付円筒埴輪と普通円筒埴輪の破片を使用して、蓋状に棺を被っていた。小口の閉塞は明瞭には行われていない。この埴輪棺の場合、円筒部分を使用しているが^(注5)、棺身全体を円筒埴輪を使って埴輪棺を造る意図がなかったものと考えている。同様に、



第2図 瓦谷古墳群埴輪棺実測図(1/40) (注1・5・6・9文献中より転載)

後円部東墳丘裾部に設けられた埴輪棺08の場合でも、鱗付円筒埴輪片を複数個体を使用して、蓋として被う状況が窺える。この棺の場合も小口の閉塞状況は明瞭でない。埴輪棺08の南に設けられた埴輪棺09も、残りは悪いが、棺身に普通円筒埴輪を用いるが、小口の閉塞状況は明瞭でない^(注6)。

また、後円部西側に設けられた埴輪棺07では、特殊な壺形埴輪を使用していたり^(注7)、前方部東側墳丘内に設けられた埴輪棺11では、棺身の下に埴輪の小片を敷きつめて、その上に棺身にあたる円筒埴輪を置いている^(注8)点が注目できる。他の埴輪棺では、墓壇内に直接棺身にあたる埴輪を設置しており、埴輪棺11は丁寧な造りを意識している。以上の1号墳の墳丘やその付近に設けられた埴輪棺の特徴をまとめると以下の様になる。

①埴輪棺の棺身は完形に近い円筒状の埴輪を用いることは少なく、破片を集め、組み合わせで形成する。②小口の閉塞は埴輪片で完全に行われることはなく、他の方法で閉塞したか、またはまったく行われていなかった可能性がある。③各埴輪棺の構造に特徴があり、埴輪棺の造り方が定型化していない。

Ⅱグループ(瓦谷古墳群の中央部分に分布：埴輪棺01・02・03・04・10・12・14・15・20・23)

古墳群中央部分では、埴輪棺の棺身部分に完形ないし完形に近い円筒埴輪を使う例が多く、小口を埴輪の小片を使用して明瞭に閉塞する。埴輪棺10を例として特徴を述べると、棺身部分には、鱗付朝顔形埴輪の円筒部分の完形品を使用し、両小口を、円筒部分や鱗の破片を使用して丁寧に閉塞する。棺身は単棺の例が多いが、埴輪棺12のように複数の円筒を連いだ複棺構造のものもある^(注10)。基本的には棺にあたる部分は、全て埴輪で覆われ、棺内・棺外の区別がより明瞭になる。

Ⅲグループ(瓦谷古墳群の南側に分布：埴輪棺16・17・18・21・22・24)

古墳に樹立した埴輪を転用した埴輪棺としては、完成したタイプと考えている一群である。埴輪棺16を例として述べると、棺身には、完形の普通円筒埴輪と、長さを調整するために底部側を打ち欠いた普通円筒埴輪を連結する。両小口は、朝顔形埴輪の頸部から上の部分を使用し、キャップの様に大きく蓋をする。この時棺端にあたる頸部の小穴を埴輪片で塞ぐ。また、棺身部分の透し穴も埴輪片で塞ぐのもこのグループの特徴である^(注11)。小口の閉塞には、朝顔形埴輪の頸部から上を使う例(16・17・18・21・22)や、蓋形埴輪の蓋部分を使う例(24)など、キャップ状のものを使用する。

Ⅳ特製埴輪棺(第2・3図)

瓦谷埴輪棺がある丘陵の頂部に単独に位置する。全長約2.1m、幅約0.5mの規模である。埴輪棺に使われた埴輪は、棺身部分を円筒埴輪状に製作した特製埴輪2個を組み合わせた

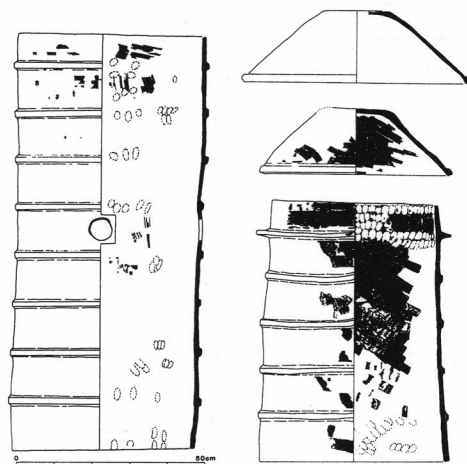
複棺構造のもので、両小口もキャップ形の特製埴輪で蓋している。また、副葬品も、瓦谷古墳群内の埴輪棺では、ほとんど出土しなかったのに比べて多く、棺外より鉄鏃4点、棺内より鉄製刀子1点^(注12)が出土している。特製埴輪はいずれも黒斑がなく、埴輪窯での焼成が考えられる。この判断の基は、埴輪の特徴にもよるが、同様の特製埴輪片が瓦谷埴輪窯群2号窯および灰原から出土したことによる。付載写真で示した特製埴輪は楕円形に大きくひずみ、その影響によるヒビ割れが内外面に多数観察できる。おそらく焼成時に焼けひずみ、割れて廃棄されたものであろう。形状は、前述特製埴輪棺の棺身部分と類似する。

さて、この特製埴輪棺の組み合わせはⅢグループで示した、埴輪棺の構造とよく類似している。特製埴輪棺の棺身部分は円筒埴輪を模しており、小口部分の特製キャップは、蓋形埴輪笠部等を模して製作したと考える。

3. 埴輪の特徴

各埴輪棺に使用している円筒埴輪の特徴は付表のとおりである。^(注13)

埴輪A・Bタイプとも古墳時代前期末の特徴をそなえており、1号墳及び周辺の小古墳群に使用されていた埴輪を転用したと考えられる。Ⅰ・Ⅱグループの埴輪棺の大半がこの両タイプ内に納まるが、埴輪棺17・18・21がⅢグループに入る。このことは、埴輪棺が造られた時期幅の影響が大きい結果と考えている。分布域を見る(第1図参照)と、この3つの埴輪棺は、Ⅲグループの北辺



第3図 特製埴輪棺実測図(注2文献より転載)



瓦谷埴輪窯出土特製円筒埴輪

付表1 棺に使用された円筒(朝顔形を含む)埴輪の特徴

タイプ名	特徴	埴輪棺
Aタイプ	・ヒレ付 ・二次調整にタテハケを使用 ・主に方形透し孔 ・最下段のタガの間隔が長い	Iグループ 05・08・11 IIグループ 02・10・12 IIIグループ 21
Bタイプ	・ヒレをもたない ・二次調整にタテハケを使用 ・方形透し孔のほか、半円形などバラエティに富む。 ・最下段のタガの間隔が長い	Iグループ 05・09 IIグループ 01・04・14・23 IIIグループ 17・18
Cタイプ	・二次調整にヨコハケを使用 ・円形透し孔 ・タガの間隔は最下段まで等間隔	IIIグループ 16・22・24

にあたっており、IIグループに近接している。おそらく、IIグループに続いて、IIIグループが造られ始めた頃のものではないかと考えている。

埴輪Cタイプは、古墳時代中期初頭の特徴をそなえており、同古墳群の南側に分布する。

このタイプの埴輪は、器高70cm以上あり、瓦谷古墳群内で使用されたものかどうか疑問があり、搬入品の可能性が既に石井氏によって指摘されている^(注14)。いずれにしても、Cタイプの埴輪は、A・Bタイプの埴輪に続く時期のものであり、埴輪棺の構造変遷の想定過程からも逸脱しない。このグループに続いて、古墳時代中期中頃に造られたと考えている特製埴輪棺が現れたのではないかと考えている。

4. まとめ

瓦谷古墳群内の埴輪棺の変遷を以下のようにまとめておきたい。

瓦谷古墳群の埴輪棺は、1号墳付近から造られ始めた。初期には埴輪棺の構造はバラエティーに豊み、定型化したパターンがなく、埴輪片を様々に利用する。利用された埴輪は、1号墳に樹立していたものを抜いて転用したのかもしれない。しかし1号墳に樹立している埴輪を、古墳造営から近い時期に抜き取ることは、制約があった可能性も考えられる。そう仮定すると、焼成に失敗した埴輪を利用した可能性があるのではないだろうか。不良品ではあるが1号墳に使うべくして焼かれた埴輪を、棺として利用することが、主体部に埋葬された人との関係の深さを意味するとも考えられる。だからこそ、1号墳周辺では、埴輪の破片を利用した、構造的にバラエティーに豊んだ埴輪棺が集中したと考えられる。この場合、1号墳の造営時期にごく近い頃に埴輪棺を造り始めることも可能と思われる。

次いで、埴輪棺の構造が定型化し始める。棺身部分には、円筒埴輪を用い、小口は埴輪片を使用して、明瞭に閉塞する。やがて、小口の閉塞に便利な、朝顔形埴輪・壺形埴輪の上部や、蓋形埴輪の笠部を多用するようになる。そして、この段階で、埴輪を転用して埴輪棺を作る構造が定型化する。

埴輪棺の構造が定型化したのをうけて、同様の構造を持つ特製埴輪棺が造られるようになる。特製埴輪棺は、この地域では埴輪窯が利用されるようになって焼かれた。特製埴輪棺の製作は、古墳に樹立する埴輪の小型化が進む一方で、埴輪棺をつくり続けようとする流れの表出であろう。その一方で、瓦谷古墳群に続いて造られた上人ヶ平古墳群の調査では、埴輪棺自体の調査例がない。

この地域で埴輪棺が造られなくなった原因としては、利用する埴輪の小型化がまずあげられる。この他、特製埴輪棺については、先述した特製棺の不良品の出土状況を考えると、埴輪窯内で大型の特製棺を焼くことには無理があったとも考えられる。いずれにしても、瓦谷古墳群で埴輪棺に葬られた階層に続く人々が、上人ヶ平古墳群形成時にどのように処遇されたかは、この地域の古墳群の分析をふまえて、改めて考えてみたい。

(ありい・ひろゆき＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 石井清司・有井広幸他「木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注2 石井清司・森正哲次・有井広幸「木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注3 石井清司「瓦谷遺跡の埴輪棺再考」(『京都府埋蔵文化財情報』第56号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995.6
- 注4 注3文献と同じ。
- 注5 伊賀高弘他「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
- 注6 石井清司・有井広幸「瓦谷遺跡の埴輪棺」(『京都府埋蔵文化財情報』第51号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994.3
- 注7 注5文献と同じ。
- 注8 注3文献と同じ。
- 注9 伊賀氏の調査では有機物による閉塞を推定する例もある。注4文献及び伊賀高弘他「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注10 注6文献と同じ。
- 注11 注6文献と同じ。
- 注12 注2文献と同じ。
- 注13 注5文献、掲載付表2を一部改変。
- 注14 石井氏は、佐紀盾列古墳群からの搬入品の可能性を指摘されている。前記注3文献と同じ P 33。

